

曲直瀬玄朔自筆処方集の研究

星野 卓之, 天野 陽介, 小曾戸 洋, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

曲直瀬玄朔は初代道三の医学を継承し、主宰する啓廸院からは名医を輩出して、後世方派として日本漢方の方向性を決定づけた人物である。折しも中国では明王朝が末期を迎えていたが、医学においては宋代の『和剂局方』や金元四大家から蓄積された経験が龔廷賢らによってまとめられ、最先端の医学として日本にも導入された。特に龔廷賢の『万病回春』は江戸前期までにおよそ20回も重刻され、初期の版本には玄朔自身も関わっている。また弟子の岡本玄治に『万病回春』を研究するように指示したとの逸話も残っている。江戸期を通じて広まった曲直瀬流の処方集『衆方規矩』は、初代道三までのような種々の医書をバランス良く引用する内容ではなく、龔廷賢医書を中心にして編まれた。玄朔による『医学天正記』とその異本群には『回春』方を導入する過程がみられ、実地臨床での経験から龔廷賢医書を高く評価していたこともうかがえる。門人らに龔廷賢方を活用する道をひらいたことが、清王朝のもと医学的にも転換期を迎えた中国医学と、鎖国し国内での醸成期を迎えた日本漢方との差異を形成するきっかけともなった。

道三(玄朔)の名を冠する医書は多いが、初代道三の影響を脱し、玄朔の時代に渡来した医書をおりこんで編まれた処方集としては、晩年に親戚筋に送るといふ奥書がある自筆本『旧新雜方』・『医方繩墨』・『医法権衡』がある。これらは江戸前期に再版され続けた『医法明鑑』とは異なり、全編にまんべんなく『回春』方を取り入れている。一方、龔廷賢の『寿世保元』や『濟世全書』の影響はみられない。これらは『衆方規矩』には特に後半を中心に取り入れられており、『衆方規矩』は玄朔の門人らにより増補されたことが理解される。

玄朔の自筆本群は一貫して、中風から始まる病門ごとの章立てのもと病論・処方述べるという初代道三以来の編集方法がとられている。『医方繩墨』・『医法権衡』の目録を比較すると、どちらか1書にしか含まれていない『回春』方が散見され、その導入過程からはどちらが先に成立したかは確定できない。処方集を編む際、実地に用いたという基準だけではなく、これまでの医書(初代道三から譲り受けた医書)を『万病回春』で補足するという目的で、これらの処方集を繰り返し作成した様子うかがえる。

目録の収載処方数は『医方繩墨』が1633処方、『医法権衡』が1239処方と膨大であり、その分内容に自前の解説はなく、純粋に原典からの引用によって構成されている。原典を参照できる権利を持つ曲直瀬家の当主によってのみ為し得る編集方法は、以後『常山方』の増補などと共通するが、膨大な処方の羅列は初学者には受け入れ難く、刊行に至ったのは『医法明鑑』までであった。そして『衆方規矩』は収載処方数をおさえ、加味を含めた処方ごとのわかりやすい構成として刊行された。また以後、啓廸院を継いだ岡本玄治は秘伝とされた口訣集を弟子に講義し、曲直瀬流のもう一つの精華である七十方や百方と略される口訣写本群を数多く生み出すこととなった。これらの処方中心かつ初学者むけの入門書は、もともとの歴史ある病門別の章立てで構成された処方集を必要としたため、江戸初期までは『医法明鑑』や『万病回春』がしきりに再版されたものと考えられる。最終的には病門別に再構成された決定版として『古今方彙』や『医療衆方規矩』がまとめられ、江戸期を通じて曲直瀬流は後世方として影響を持ち続けた。

玄朔自筆の処方集群からは病門ごとの実地に用いやすい処方集を原典に忠実に編集する意図があるのみで、衆目をひく口訣の入り込む余地は認められない。しかし江戸中期に再構成された曲直瀬流処方集は、結局その構成も増補処方も、玄朔晩年の労作に似た内容となっており、玄朔自筆処方群は後世方の行く末を予言する内容であったと言える。